

きも、春の花の年ごとに、かどらす句ひ、秋の月の何れの年も、
 れなじく照すを見せば、かへらぬ人の恋しくて、獨りそでをぞ絞る
 める。いまは、冬夏の休暇にかへるも、愛づる人もなし。うをしきおど
 も、悲しきこと、も、たれにか語らむ。たゞ、た向けの花を採りて、御奥
 づきにまゐり、過ぎにしむかしをしぬび、御心を草葉のかげに、慰め
 まつるばかりなりかし。

蜩 蝶

龍 南 生

天さがる

鄙ひるどしいへどこゝもなほ

音にきこゆる花の里

必ず都にあふねども

柳櫻をこぎませし

眺めは春のにしきかな

塩くむ海士も杣人も

浮世のわざを打きてゝ

あくがれ遊ぶ御代の春

われもあらばん日毎く

夢の間をしき頃なれや

夢の間をしき頃なれや

見渡せば

花と八重あり一重あり

霞の奥は九重の

雲井にさける山櫻

吉野ざくらと緋さくらに

鞍馬の山の雲珠櫻

とりくく匂ふ春風に

人の心は浮くめれど

われは櫻をこのまねば

ひねもすめでん菜の花を

翅の力盡さんまで

清き匂に飽かんまで

散るもせず

咲きも残りぬ菜の花の

こちふく風は誘はれて

降るや黄金こがねの花の雪

積りにけりな我が袖も

朝の露に浴ゆわみして

勇み出でよえわれながら

弱りにけりなわが翅

入相告ぐる鐘の音も

あなたの峯にひしくなり

いざやいこそん花の影

楽しき夢をむすばいや

花さけば

花より出でゝ花に入る

春の遊びの面白く

長き日影のくるゝまで

知らでむつれえ花の下に

五葉の風も吹かざせば

かざすや花の玉鬘めづら

羽衣ういの翅ををさめつゝ

匂ひぬならぬ床の上に

しばしまどろむ天乙女

夢はしさまし玉ふなよ

夢はしさまし玉ふなよ

もゝちどり花になれ行くあだし身は

はかなきはとゞもうらやまれぬる

(古今集)

故の第五高等中學校々長平山乃大人の

一周年乃御祭に奉る歌の序

園 哲 雄

千里の遠き海山を隔つる人をこひわびてとる筆と。よき歳月をふとち。又返りごとおこするをりもあらむと。とる甲斐もころあらめ。されどとりてかひなきもれと。なき君を思ひ。うたてさをつる筆にちむありける。平山の大人の學校のことをいそしみながら。五月雨の晴間を照らす月とにも。雲かくまたまひしより。唯闇路に迷ふこゝちも。まださめやらぬまに。月日の流るゝと。淀河のよどむともなく。はや一年にめぐりあふ御祭の時にもなりけり。招けどもかへらず呼べども答へず。あかいたましあなかなし。晋室七世の風にかへれる阮子もありしときけば。さあれかしど。をさなく慕ひ奉れることぞ。うき世の夢のとかききあらひなるらむ。抑大人はいまへみことかうぶり。出でゝ外國に學びたまひしも。ひとへわがみかどの御爲に。かれのまされるをとりたまふ眞心にぞありけまば。やがて位山上りたち。やんごとなき人と仰かれて。眞心のしるしあり。猶まきりに謀りたまふところありけむを。とからざりき去年の今日。やうやう四十の齡をこゆるほどの。さかりなる御身をもて。永くこの世を去りたまひしとは。髣髴てやむとは耳